

『トリストラントとイザルデ』 (3)

小澤昭夫 訳

6 トリストラントのアイランドへの求婚の旅 (続き)

トリストラントが竜<sup>1</sup>を退治し、剣の刃こぼれから素性を知られること

翌朝早くに、トリストラントは念入りに武装すると、彼が大きな名誉を得ることになった場所へと馬を進めて行った。

すると途中の野原で五人の男が何やら様子を窺っているのが見えた。そこで彼は速歩で彼らの方へ向かった。すると彼らの一人がいきなり向きを変えて駆けだした。

トリストラントはその男を追いかけ、髪の毛をつかむと大声で尋ねた、誰が彼をそのように追い立てるのかと。その男は答えた。竜の奴だ、そいつがこの国で多くの人を焼き殺してきたのだと。

「そいつが今にも怒り狂ってやってきて、私の命を奪うかもしれない。逃げるに越したことはない。後生だから、私の邪魔をしないでくれ。貴公もさっさと逃げ給え」

トリストラントは、どこで竜を見たのか、本当のところを話すように、と彼に求めた。男は、そこへ行く道を若者に教えた。

「すぐに立ち去るがよろしい」

トリストラントはこう言うと、竜のいる方へと馬を進めて行った。(1698-1729)

やがて遠くに竜の姿を認めると、トリストラントは馬に拍車を当てて、深い谷へと進んだ。その場所で、竜が彼の方へ近づいてくるまで静かに待っていた。それからこの勇敢な人は駆足で竜に近寄ると槍を突き刺さそうとしたが、少しも効果がなく、槍が真二つに折れただけであった。槍が折れるとすぐに彼は剣を引き抜いた。今度は竜が火を吐くと、彼の乗馬は焼け焦げて骨だけになった。

トリストラントは徒で竜に駆け寄って行き、手にした剣で竜を打ち殺した。彼が怒りを込めて剣を振るうところでは、何一つ対抗できるものはなかったのである。こうして勇敢な若者は、巨大な竜との闘いに勝利を収めた。

後日、彼はこの竜を大いに役立てたけれども、この勝利は彼には高くついた。というのも、この竜の吐く炎によって彼は危うく焼き殺されるところだったからである。彼は勇敢に戦って勝利を得ると、竜の口から舌を切り取って、大事に取っておいた<sup>2</sup>。

トリストラントは昂揚した気分でその場所を離れ、沼地へと歩いていった。そこで身体を冷やそうとしたのであった。というのも、

<sup>1</sup> ここ (1698 行) での竜は、serpant (初出の 1679 行では serpent) である。本作では、この serpant に加えて wurm (1696 行 etc.) と tracke(drache) (1716 行 etc.) が同義で用いられている。G 作でも、竜には serpant と trache の両方が使われている。散文民衆本 (Brandstetter 編) では、竜は serpant (662 行 etc.) または wurm (681 行 etc.) である。

<sup>2</sup> G では、トリスタンは切り取った舌を「ふところに」押し込む：in sinen buosem er si stiez (9063)。また、Bußmann 編の „Tristrant“ に収められている「レーゲンスブルク断片(Rm)」では、「ズボンの中に」押し込んでいる：und stah si in sin hosin (1673/ Rm 25)。Krohn (G 作 Tristan の注釈書) によれば、象徴としての舌のモチーフ—それに依って正当性が証明される—は、メルヘン文学では広く流布しているとのことである。

この勇者は、この闘いによって、木炭のように真っ黒になっていたからである。彼は沼地で冷たい水の湧き出ている場所を見つけると、そこに身を横たえた。彼には鉄の鎧兜が熱くて、もう死ぬかと思うほどであった。それ故に、トリストラントは水に浸かっていたのである。(1730-1769)

さあ、お聞きください。竜に立ち向かう勇気もなく、遠くから様子を窺っていただけのあの勇士たち<sup>3</sup>が一体誰だったかを。

それは内膳頭でした。彼が仲間と共にどんな悪巧みをしたか、お望みの方はお聞きください。

内膳頭は仲間に行った。

「あの勇士は、槍と楯を持って、まるで嵐のようにやって来たが、きっと竜が隠れている場所を探しにいったのだ」

仲間たちは恐る恐る彼の後について行った。すると彼らは思い掛けず竜の死骸に出くわした。内膳頭は仲間たちにこう求めた。

「今からは、この竜を倒したのは私だ、と話してくれたまえ。その代わりに、諸君を金持ちにして進ぜよう」

それで彼らの得にもなるのなら、彼のために喜んでそうすると彼らは請け合った。

彼らはあたり一帯でトリストラントを探し回った。恥ずべきことに、彼の命を奪おうとしたのであった。彼らが、元気一杯のトリストラントを見つけていたならば、彼らの思い通りには行かなかったであろう。

暫くすると、彼らは言った。

「きっと、あの男もまた死んでいますよ」  
(1770-1802)

臆病者の内膳頭は、生き証人がいなくなれば窮地に陥ることもなくて、むしろ運がいいと思った。

直ちに彼は王のもとへと馬を走らせ、自分

が竜を退治したと嘘の作り話を伝えた。彼は賢く立ち回って、王に嘘を信じさせ、王女をわがものにしようと目論んだのであった。

それを聞いて王は答えた。

「私が約束を違えたならば、王には相応しからぬ振る舞いであろう。けれども、もっと良く知りたいのだ。誰が本当に竜を退治したのか」

「それは心外なおことばというもの」内膳頭は憤慨して言った。

「私が大胆にもそんな嘘を申し上げたなら、全く怪しからぬことございましょう」

こうして彼は王を欺き、王はそれが真実だと信じたのであった。

さて王は王女に、内膳頭が命がけの勇敢な行為によって、彼女を妻とする権利を得たことを伝えた。

それから王は、王女を内膳頭の妻に与えるに公に宣言した。何しろ彼は彼女のために竜を退治したのだから、王女もそれを喜ぶことができるであろうと。

けれども王女はすぐに反論した。

「お父様、私の話をお聞きください。彼は真実を語っていません。あの男は勇敢な行いなど一度もしたことはありません。竜に立ち向かう勇気が、一体どこから突然湧いて来たのでしょうか。真実を知るまでは、お決めになったことはお預けにしてください。あの男には、明日の朝まで待つように命じてください」

「よろしい。そうしよう」と王は答えた。  
(1803-1843)

こうしたことが起こっていた一方で、内膳頭は苛立ちを隠さなかった。彼は、王の言質を楯に取って、約束の実行を強く求めたのであった。

さあ、お聞き下さい。本当は誰が竜を退治したのか、イザルデ姫がどんな知恵を使って知ったのかを。

王女は、ペレニースに頼んだ。夜が明けた

<sup>3</sup> 原文は *helden* で、無論皮肉である。  
*Buschinger/Spiewok* の現代ドイツ語訳では、  
"Helden" と引用符付きで強調されている

ら、密かに馬を引いてくるようにと。そして侍女のブランゲーネには、明日の朝、竜の死骸がどうなっているのか見に行くつもりだと伝えた。

朝早くに、従者ペレニースが馬を引いて来た。イザルデ姫は、自分の名誉のことを思った。彼女らは、トリストラントが通った形跡のある場所へと馬を進めて行った。するとイザルデがブランゲーネに言った。

「ご覧なさい、この蹄の跡を。この馬が、竜を退治した勇者をここへ連れて来たのです。この蹄鉄の打ち方をよく見るのです。この国では、馬の蹄鉄をこの足跡にあるようには打ちません<sup>4</sup>。これに乗って来た人が、竜を倒したのです。間違いありません」（1844-1878）

それから間もなくして、二人は、竜の死骸があるところに着いた。そこで彼女らは、立派な楯を見つけたが、ひどく焼け焦げていて、二人には色も識別できなかった。それは以前には光り輝く高価なものだったのだが。

二人は更に黒焦げの馬の死骸を見つけた。二人はそれをしげしげと観察した。その馬がこの国で育てられたものではないことが、二人にはよく判った。

このように私は本で読み、話にも聞いたのです。

「ああ、どこに行ったのでしょうか。この馬に乗ってきた勇敢な人は」

美しい姫は嘆いた。

「人殺しどもが、その人を殺めて、死体を道外れのどこかに運んだのだわ。そんな輩は呪われるがいい。その人は、きっとこの辺りのどこかに埋められている筈。見つけられるものなら、見つけ出したい」（1879-1903）

王女はペレニースに頼んだ。念入りに探して、その勇士を見つけてくれと。彼女は、彼を引き立てるつもりだし、一生困らないだけ

裕福にすると約束した。

彼らが長いこと探す必要はなかった。遂にブランゲーネが、トリストラントの横たわっている沼地に行き着いた。

この乙女は、兜がガラスのように光るのを目にすると、急いでそこへ駆け寄った。すると彼が身動きしたように見えた。彼女は王女に向かって叫んだ。

「勇士を見つけました。ひどく弱っています。すぐに来てください。この人をまだ救えるか、お確かめください」

王女はその勇士を見てほっとした。すぐに側に行くのと頭から兜を脱がせた。

その時、トリストラントは、婦人たちが彼のために手を尽くしているのに気がついた。彼は目を開けて尋ねた。誰が兜を脱がせてくれたのかと。

すぐに王女が答えた。

「心配しないで今はお休みなさい。兜はすぐにまた返してあげます」

彼女は、彼の横に膝をつくと続けた。

「私が兜を預かって置きます」

彼女は、彼をそのままにはしておかず、ペロニースに命じてその場所から連れ出させた。それから直ぐに彼の武装を解きにかかった。彼らは忠実やかに勇士の世話をした。すなわち、イザルデとブランゲーネは彼の鎧を脱がせ<sup>5</sup>—その手際には非の打ち所がなかった—、そうしてのち彼らは町へと急ぎ駆け戻って行った。（1904-1944）

さてイザルデは、トリストラントのために風呂の用意をさせた。王女は、勇者を手ずから入浴させた。それによって彼を元気づけようしたのであった。更に彼女は、彼が再び元気を回復するように、彼の身体じゅうに効き目のある軟膏を塗った。そのお陰で彼は心地よくなり、再び生氣を取り戻した。そしてこ

<sup>4</sup> 馬がアイルランドの国のものではないと判るのは、Gの作では「馬具 gereite」の違いによってである。

<sup>5</sup> Lichtenstein 版（1850-52）では、「彼女（イザルデ）自ら兜と剣を預かり、ブランゲーネが喉当てをはずした」である。

のとき、彼が探していた婦人は、まさにこの人だと、彼は確信したのであった。トリストラントは彼女の髪の色を注意深く観察した。この人を求めて、彼は長く辛い旅をしてきたのであった。若き勇者の顔には思わず笑みがこぼれた。

王女はそれに気づくと、心中ひそかに考えた。

「何かしたのかしら。彼に愚かだと思われるようなことを。でも思い当たることがない」

(1945-1969)

なおも彼女は考えた。

「この方は、望んでいるのかも知れない。私が彼の剣の汚れをぬぐうのを。でも、この英雄なら、十分それに値するわ」

こう考えて、彼女は剣をぬぐい始めた。その剣には刃こぼれがあり、それによってこの男がトリストラントだと彼女は気がついた。深い悲しみに襲われて、彼女は剣を置いた。それから、巾着を取ってくると、剣の欠片を取り出して、刃こぼれに合わせてみた。欠片は刃こぼれにぴたりとはまるのであった。これでトリストラントの(モーロルトを殺した)罪も明らかとなり、彼女は叫んだ。

「そなたはトリストラントで、竜を退治したのですね。でもそんなことは何の役にも立ちません。生きて逃れられるものですか。そなたの命で、伯父の命を償わねばなりません。そなたのことを、王である父に知らせるつもりです」

「いけません、王女さま」トリストラントは答えた。

「そなたは私に対して罪を犯したのです」

「いいえ、決してそんなことはありません」

「伯父を殺したではありませんか」

「正当防衛で止むを得なかったのです」

「その償いをするのです」

「一体何を以てでしょうか」

「そなたの命です」

「命を命で償うのは、穏やかではありません。

ああ、美しく優しい姫様、よりもよって私がなぜこんな目に遭うのでしょうか」

「あなただからです」

「そんな償いなどしたくありません」

「私には自明のことです」

「どうか私を生かしておいてください」

「いいえ、私は伯父の復讐をしなければなりません」

「高貴な御婦人のなさることではありません」

「あなたに対して高貴に振る舞う気はありません」

「本当に復讐をお望みですか」

「そうですとも」

「絶望的な気分になりました」

「一体なぜですか」

「聞いてくださいますか」

「お話しなさい」

「あなたの高貴とは言えぬ振舞いが悲しいのです」

「そんなことはないでしょう」

「いえ、本当です」

「まあいいでしょう。でも確信があります。私が別な振る舞いをしたとて、あなたには何の助けにもならないと」

「それが助けになるのです」

「どうしてそんなことが起こりますか」

「気高い心がおありなら、こうお考えになるでしょう。＜彼は私の保護下にあつて、しかも囚われ人だ。もし誰かが彼を殺すなら、その仇を討つ＞と。でもよくお考えください。あなたは私を自らここへ連れて来られたのですよ」

「それは十分考えました。不名誉となつても、味わった苦痛のためにあなたに復讐するので。これから父のもとへ行き、あなたがここにいてを伝えます。あなたの計略が身を助けることはありません。あなたには伯父の死の償いをして貰わねばなりません」

(1970-2026)

イザルデが今にもトリストラントに襲いかかろうとした時、ブランゲーネが駆けつけてきた。

「このことをお父上に明かしたならば、この方は殺されるでしょう。そうなったら、後悔なさるに違いありません。この愚かな行いをもはや償うことはできませんよ」

このようにブランゲーネは助言した。

「もし今この方が命を失えば、お父上の召使いの妻となるのですよ。それがあなたの名誉になることですか。それこそあなたのために避けたいことです。トリストラント殿は、高貴なお生まれの方で、優れた戦士です。よくお考え下さい。この方が、たとえあなたの御親族すべてを打ち殺したとしても、まだ悲しみに耐えることができるはずです、あなたに相応しくない男に嫁がされるよりは」

王女はじっくり考えて、彼を許す気持ちになった。ブランゲーネがこのように語ったので、彼女の悲しみと怒りは薄らいだ。

王女は、トリストラントのために新しいピロードの衣類を運ばせ—ブランゲーネがそれらを彼に手渡した—、彼をブランゲーネの庇護に委ねた。トリストラントが新しい衣装を身に着けた姿は見事であった。(2027-2061)

高貴な姫は、彼が与えた苦しみを許し、和解の印に彼の口にキスをした。こうしてのち王女は父のもとへと急ぎ、誰が竜を退治したのか、彼女が探り出したことを伝えた。

「そなたが探り出したと」

「そうです、わたしが。あの臆病者は竜に触れてさえいないのです」

「しかし、彼が退治したと言っているではないか」

「いいえ、彼ではありません」

「それを裏付ける証拠もあるのだ」

「どんな証拠でしょう」

「彼の四人の部下だ」

「彼らは信用できるのですか」

「それはわからぬ。彼の部下だからな」

「彼が命じることなら、彼らは実行するでしょう。彼らの言い分を信用なさるのですか。彼は竜には手も触れなかったのですよ」

「どうしてわかるのだ」

「私にはよくわかっているのです。竜を退治したその方に、好意を寄せてくださいますか」

「もちろん、そうすると。その者は今どこにいるのだ」

「すぐ近くにいます。すぐに連れて来られます」

「ではすぐに連れて来なさい」。

「本当に、彼に好意を示してくださるのですね」

「彼が、たとえ私に何をしても、それは赦される」

「その人を生かしてくださるなら、和解を確かなものにしてください」

「彼が私に対してしたことならば、何であれ私は赦すとしよう」

「それでしたら、彼の代わりに私に和解のキスをしてください」

「そなたは私に、この上何を求めるのだ」

「父上は、これで彼を完全に赦したのですね」

「そうだ、完全に」

「これで彼は安心して父上の前に出てこられます。でも、明日の朝までお待ちください。そしてこれを理由に、家臣を呼び集めてください。そうしたら、私とその勇者を連れて参ります。あなた方皆の前で、彼が証明します。臆病な内膳頭が竜を退治したのではないことを。内膳頭は、私たちの前で、竜を見る勇気がなかったことを認め、竜が何処で、どのように、誰の手にかかって死んだかを言わねばなりません」(2062-2105)

「約束しよう」王は言って、それ以上疑うことはなかった。王は直ちに国中の家臣、伯や大公のもとへ使者を遣わした。

その知らせが高貴な人たちに届くと、彼らは、男爵も従士もみな直ぐに集まってきた。

内膳頭もまた彼の従者たちに使いを出し

た。彼は信じて疑わなかった。王が彼に王女を授けてくれて、美しい妻と共に人生を快適に過ごすことになるのだと。

翌朝早く、人々はそれぞれにその準備を整えていた。トリストラントは婦人部屋に匿われていた。そこでは彼に必要なものが取り揃えられていた。けれども彼には心配事があった。クルネヴァルと密かに連絡を取りたかったのである。そのため彼はペレニースに頼んだ。船まで行ってクルネヴァルを呼び、彼をここに連れてきてくれ。他の騎士や従者、水夫たちはそこに留めておいてくれと。

ペレニースはそこへ行き、トリストラントの頼みを果たした。クルネヴァルはやってくると直ぐにトリストラントと打ち合わせをした。その後、トリストラントは彼を船に帰らせたが、その際、仲間たちには次のような指示を与えるよう命じた。

トリストラントが苦境にあることを思い、明朝早くに皆で宮廷の王の広間に来て、壁際の腰掛けに座るように、そのために皆がそれぞれ一番良い衣装を身につけるように、そして誰かに話しかけられても、トリストラントが現れるのを見るまでは、彼のために沈黙を守るようにと。

「私は確信している、この件はここで良い結果を迎えると。そのために我々は派遣されたのだ」(2106-2153)

こうしてクルネヴァルは船に戻った。仲間たちは、トリストラントからの言付けを聞くと心から喜び、神に感謝した。騎士たちは、トリストラントの名誉のために、翌日の準備をした。

夜が明けるとすぐに、彼らは衣装を纏った。これらの衣装は、華やかな絹地とオコジョの毛皮から作られ、縁には黒テンの幅広の笹縁が縫いつけられていた。それらをマルケの国から彼らは大量に持参していたのであった。毛皮には、高価なビロードの裏が付けられていた。彼らはそのほかにも、およそ考え付く

限りの様々な装飾品を、好みのままに身につけていた。すなわち、キイチゴの実のような暗赤色の毛皮があり、金を織り込んだ絹布があり、ウールのスカーフがあり、宝石があった。それらはどれも、どこかよその国ではこれ以上に良いものが見いだせないような品々であった。これらを騎士たちは大量に用意していたが、彼らの名誉のために、コーンウォールから持ってきたのであった。彼らは、トリストラントにも密かに立派な衣装を届けた。

アイルランドの諸侯は、この豪華な衣装を目にしたとき、このように高価なものがアイルランドの国に入ってきたことはない、言い合っただのである。

こうして異国の人たちは、城にやってきて、壁に沿って並んだベンチに腰を下ろした。彼らは十分に賢かったので、彼らの主人の指示に忠実に従ったのである。誰もがそれを喜んで行い、礼儀正しく座っていた。(2154-2199)

さて、王はこの騎士たちについて尋ねた。

「彼らは、この国の者たちか」  
けれども、これらの立派な人たちについて知っている者はいなかった。

王は再び尋ねたが、彼らについて何かを語れる者は誰もいなかった。止むなく王は娘に使いを出した。勇者を伴ってすぐに彼の前に来るようにと。

王女は、トリストラントの手を取って、一緒に父王のもとへと歩いていった。

トリストラントが、広間に入って来るなり、それまで無言で座っていたあの人たちが皆一斉に立ち上がり、彼に駆け寄ったのであった。彼らがこの勇者に仕えていることが、これで誰の目にも明らかになった。

王は尋ねた。彼はいったい何者かと。

「父上、このお客様に御挨拶のキスをしてください」王女が答えた。

王は、王女が頼んだとおりにした。これによって王女は、トリストラントと仲間を、確実に王の保護下に置いたのである。

「これから明らかにいたします」

王女は続けて言った。

「この方が誰なのかを。父上は約束を守り、この方に保護と安全を保障なさいましたが、それがこれから試されるのです。この方は、父上のもっとも大切な人、私の愛する伯父上を亡き者にしたのです」（2200-2239）

### トリストラントの正体を王が知り、彼にイザルデを預けること<sup>6</sup>

するとすぐに王は言った。

「なんと、トリストラント殿とは。あなたに安全を約束していなければ、どんな成り行きになろうとも、わたしには関わりのないことだ。しかし、あなたが私にどんな苦痛を与えたにせよ、今は安心しておられるがよい」

王女が応じた。

「それがよろしいと思います。何しろこの方は、名望ある優れた騎士なのです。伯父を亡き者にしたことも、意に反して止むを得ずしたことです。さもないと貢納の要求から伯父上のお国を守ることはできなかったのです。トリストラント殿は敵ではありません。この方は、父上に害をなすものを追い払うために、海を越えてこの地へやってきたのです。一人で竜と戦って退治してくれました。お陰で私たちは大きな利益を得たのです」

すると内膳頭が立ち上がって反論した。彼が竜を退治したと自慢するのは全く無礼というもので、それをしたのは自分なのだ<sup>7</sup>。そして彼は、王に約束を果たすように求めた。

<sup>6</sup> この見出しは、写本 H (Cod. Pal. germ. 346) では朱で記され、王が語る言葉の途中—この Buschinger 版では 2251/52 行—に挿入されている。しかし、この位置では、王の話の途中で遮る形となって極めて不自然であり、王の話の始まる前に置かれるのが正しいであろうと Lichtenstein 版の注は指摘している。これに従って 2239 行の後に移動した。

<sup>7</sup> G 作では、内膳頭が証拠として持ち出すのは、竜の死骸から切り落として運んできた首である。竜の口の中に舌は見つからず、彼は赤恥をかくのである。

(2240-2268)

この言葉はトリストラントを憤慨させた。彼は王に向かって、怒りを込めて語りかけた。

「王様、彼の言うことは正しくありません。もし彼が、私と戦う勇気のある立派な騎士ならば、私が彼の首を切り落とすか、彼の前に死して横たわるかです。王様、もし必要とあれば、竜を倒したのは私であることを証明いたします。まずは彼の四人の従者の助けによってです。彼らに真実を打ち明けるつもりがあればですが。何しろ、彼らは、彼と一緒に竜を探しに行き、彼と一緒にいたのです。そしてまたこの舌によってです。これは、私が竜の口から切り取りました。彼には、私がどのようにして竜を殺したかを、見る勇気さえなかったと、請け合います。二人の御婦人もそれを裏付けてくださいます」（2269-2290）

この説明で皆には十分であると思われた。内膳頭は不安になっていた、というのもそれがもはや冗談では済まなかったからである。この愚か者は友人たちに、この件で彼らと相談したい、是非ともそれが必要だと持ちかけた。

けれども彼らは脇へ離れて行き、彼の縁者の一人が話しかけた。

「もし貴公が彼に闘いを挑むなら、率直に言うが、貴公は命を失うぞ。美しい御婦人が貴公に何の役に立つというのだ。トリストラントは勇敢な男だ。優れた戦士であることを、彼はもう幾度も示してきたではないか。貴公が竜を退治したのでなければ、戦うのは止めにしなさい。縁者の貴公に、衷心からの助言だ。正当性もなく彼と戦うなら、きっと後悔するだろう」

「トリストラントと戦うつもりはない」

臆病者は答えた。

「竜は、私が退治したのではない」

この相談の後、臆病者の内膳頭は、満座の中で、自分が竜を退治したのではないと白状し、当然のこと王女を妻に迎えるべきはトリ

ストラントだと発言した。

王は、彼がそれをもっと前に白状していればよかったのだ、と評した。居合わせた人は皆、今し方の内膳頭の告白を聞いてからは、彼を軽蔑したのであった。

彼は、自分がこんな策をめぐらしたことを、今日もなお嘆いている、と私は思う。この恥

ずべき行為のために、彼は名声の全てを失ったのである。彼はこの地を去らねばならず、二度とそこに現れることはなかった。

彼が何処へいったにせよ、私にはどうでも良いことです。神さまが彼をお怒りになりますように。(2291-2334)

## 7 媚 薬

さて、トリストラントは、美しい乙女に関する約束を、王に思い出させた。王は約束を違えなかった。それを姫は喜んだ。これに反対する者もまたいなかった。

そこでトリストラントは言った。

「王様、私が誰の名代で王女様に求婚するのか、お聞きください。と申しますのも、これは王女様にとってまことに相応しいことなのです。王女様を、私の伯父のところにお連れいたします。伯父のもとが、王女様はお気に召されると思います。伯父は立派な王です。私自身は、妻を娶るにはまだ若すぎるといふものです」

「それが、そなたの望むところならば、喜んで同意しよう」

「そう願います、王様。私が王女様を伯父に捧げますこと、キリスト様も御存知です」

「確かに、伯父上のマルケ王が娘を妻にするほうが良い。というのも、そなたが娘を辛い目に遭わせたからだ。それにまた心配でもあるのだ。娘がそれをしばしば思い出すとしたら、そなたらは相和して共に暮らすわけにもいくまいと」

「おっしゃるとおりです」トリストラントは応じた。

「伯父のもとへ王女様をお連れします」

王はイザルデの手をトリストラントの手に重ね、安全に彼の伯父のもとへ導いてくれるように、娘を彼の誠実な保護に委ねた。トリストラントは王女の手をしっかりと握った。王

は、彼の地位に相応しく、高価な嫁入り仕度をさせて、娘を送り出した。(2335-2370)

一方、イザルデの母は、小さな瓶を持ってきて、ブランゲーネにそれを渡した。

「お願いだから、この小瓶を持って行っておくれ。あなた以外には誰にもこれに触れさせてはいけません。コーンウォールの国に着いた後、娘と夫とが一緒に床入りするときに、二人にこの飲み物を与えるのです。一滴残さず飲み干すようにお命じなさい。念には念を入れて保管するのですよ。二人の他には誰もこれを飲まないように」

しかし、この願いは、船旅の途上で、空しいこととなった。

さて、この飲み物には次のような性質があったのである。

男と女が二人一緒にこれを飲んだならば、二人は四年の間、もはや離れることができなかつた。どんなに断念しようとしても、生きている限り、二人は全身全霊で愛し合わずにはいられなかつた。四年の間、一日とて離れてはいられないほど、彼らは激しく愛し合うのであつた。昼といわず夜といわず、一方が他方を絶えず見つめるのであつた。<sup>8</sup>

このように語られているのを、私は聞きました。(2371-2400)

また、この飲み物にはこんな作用がありま

<sup>8</sup> 媚薬の効力には、本作では4年、ペルールの作では3年の期限がある。G作では、効力に期限がない。



した。二人が、一週間互いに話さずにいると、各々が病気になって衰弱し、ついには二人とも死なねばならなかったのです。

この飲み物は、これほど強い力を持つように調合されていたのです。私の話を信じてくださいよ。

さて、王が、旅装を調えた娘を送り出すと、トリストラントは王妃と友好的に別れの挨拶を交わした。

船の帆が張られると、風が強く吹き込み、速やかに船を沖へと押し流した。イザルデは、お供の婦人たちと共に、船尾にある婦人部屋で手厚くもてなされていた。彼らが望むものは、十分に与えられていた。しかし、イザル

デは海の旅には不慣れで、船足が速くて辛いと嘆いた。

そんな折、陸地が見えてくると、船乗りたちは帆を下ろして帆柱に固定した。望ましいことに風も弱まった。船は或る港に入って行き、そこで皆が旅の疲れを癒すことができた。

船乗りたちは陸に上がり、誰もが思いのままに過ごし、時間を持て余すことはなかった。その日は、ひどく暑い日であった。海辺では、人々が思い思いに散策していた。

(2401-2444)

(続く)

## テキストと参考文献

### 1 使用テキスト

Eilhart von Oberg. *Tristrant und Isalde* (nach der Heidelberger Handschrift Cod. Pal.Germ.346).

Herausgegeben von Danielle Buschinger. Berlin 2004.

(Berliner Sprachwissenschaftliche Studien Band 4)

Eilhart von Oberg: *Tristrant* –Universitätsbibliothek Heidelberg, Cod. Pal. germ. 346

(<https://digi.ub.uni-heidelberg.de/diglit/cpg346>)

ハイデルベルク大学図書館がインターネット上に公開している写本 H の写真版

Eilhart von Oberg. Herausgegeben von Franz Lichtenstein. Hildesheim/New York 1973.

(Nachdruck der Ausgabe Straßburg und London 1877)

Eilhart von Oberg. *Tristrant*. Synoptischer Druck der ergänzten Fragmente mit der gesamten Parallelüberlieferung. Herausgegeben von Hadumod Bußmann. Tübingen 1969.

(Altdeutsche Textbibliothek Nr. 70)

Eilhart von Oberg: *Tristrant*. Edition diplomatique des manuscrits et traduction en français moderne avec introduction, notes et index par Danielle Buschinger. Göttingen 1976.

(Göppinger Arbeiten zur Germanistik Nr. 202)

### 2 現代ドイツ語 (Neuhochdeutsch) 訳

Eilhart von Oberg. *Tristrant und Isalde*. *Mittelhochdeutsch/neuhochdeutsch* von Danielle Buschinger und Wolfgang Spiewok. Greifswald 1993.

(Greifswalder Beiträge zum Mittelalter. Serie WODAN Band 27)

Eilhart von Oberg. *Tristrant und Isalde*. Neuhochdeutsche Übersetzung von Danielle Buschinger und Wolfgang Spiewok. Göppingen 1986. (Göppinger Arbeiten zur Germanistik Nr. 436)

3 散文民衆本

*Tristrant und Isalde*. Prosaroman. Nach dem ältesten Druck aus Augsburg vom Jahre 1484, versehen mit den Lesarten des zweiten Augsburger Druckes aus dem Jahre 1498 und eines Wormser Druckes unbekanntem Datums. Herausgegeben von Alois Brandstetter. Tübingen 1966. (Altdeutsche Textbibliothek. Ergänzungsreihe 3)

4 参考テキスト

アイルハルト作以外のトリスタン物語については、以下のテキストを使用した。

Berol. *Tristan und Isolde*. Herausgegeben und übersetzt von Ulrich Mölk. 2., verb. Aufl. München 1991. (Klassische Texte des Romanischen Mittelalters in zweisprachigen Ausgaben Bd. 1)

Thomas. *Tristan*. Eingeleitet, textkritisch bearbeitet und übersetzt von Gesa Bonath. München 1985. (Klassische Texte des Romanischen Mittelalters in zweisprachigen Ausgaben Bd. 21)

Gottfried von Straßburg. *Tristan*. Nach dem Text von Friedrich Ranke neuherausgegeben, ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Rüdiger Krohn. 3Bdn., 2., durchgesehene Auflage. Stuttgart 1981.

ただし、第3巻は、初版 1980 と改訂第3版 1991 (3., neubearbeitete Auflage 1991)。

5 トリスタン物語の邦訳

・ベルルールとトマの断片

ベルルール (新倉俊一訳) 『トリスタン物語』 『フランス中世文学集1 一信仰と愛と一』 白水社、1990年、149-267頁。

トマ (新倉俊一訳) 『トリスタン物語』 同上書、269-354頁。

佐藤輝夫『トリスタン伝説一流布本系の研究』中央公論社、1981年。

同書の「資料篇」に、ベルルール作『流布本系 トリスタン・イズー物語』(423-586頁)とトマ作『風雅体本 トリスタン物語』(587-786頁)が収められている。

・ゴットフリート

ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク、石川敬三訳『トリスタンとイザルデ』郁文堂、1977年改訂第二版、1992年改訂第五版。

・ジョゼフ・ベディエ (フランスの中世文学者) がトリスタン伝説の原型として復元した物語

ベディエ編、佐藤輝夫訳『トリスタン・イズー物語』岩波文庫、1977年第25刷、1985年第32刷改版。

・散文民衆本

小竹澄栄訳『トリストラントとイザルデ』(ドイツ民衆本の世界VI) 国書刊行会、1988年。

・アイルハルトの断片

アイルハルト・フォン・オーベルク (小澤昭夫訳) 『トリスタン物語』(前編・後編) 『北陸学院短期大学紀要』第19号1987年、第20号1988年。

上記の Hadmod Bußmann 編集による 12 世紀の写本断片三種の対照テキストを訳出したもの。

・ハンス・ザックスのトリスタン劇

ハンス・ザックス（小澤昭夫訳）『トリストラントとイザルト—悲劇7幕』（前編・後編）『八戸大学紀要』第20号2000年、第21・22合併号2001年。

#### 6 参考文献

Artus- Lexikon. Mythos und Geschichte, Werke und Personen der europäischen Artusdichtung.

Von Rudolf Simek. Mit 32 Abbildungen. Stuttgart 2012.

Deutschsprachige Literatur des Mittelalters. Studienauswahl aus dem 'Verfasserlexikon' (Band 1-10) besorgt von Burghart Wachinger. Berlin/ New York 2001.

Lexikon des Mittelalters I - IX. München 2003.

Wilhelm Volkert: Adel bis Zunft. Ein Lexikon des Mittelalters. München 1991.

グラント・オーデン著、ポーリン・ペインズ挿画（堀越孝一翻訳/監修、関哲行・石渡明夫・網野公一・川野美也子翻訳）『西洋騎士道事典』原書房、1991年。

三浦権利『図説 西洋甲冑武器事典』柏書房、2000年。

#### 執筆者紹介（所属）

小澤昭夫 八戸学院大学 健康医療学部 人間健康学科 教授